

を調べた。中毒起因物質は、外来では幼小児のタバコ誤飲が多いため家庭用品が多く、ついで医薬品、農薬、ガスであり、入院患者では、農薬、医薬品、ガス、家庭用品の順だった。農薬では、パラコート、有機リンが多かった。死亡例はパラコートのみで死亡率は53%であった。中毒患者の年齢は、外来患者では1歳未満が比較的多く、入院患者では12歳以上が多かった。医薬品による入院患者ではベンゾジアゼピン系鎮静・睡眠薬が多かった。農薬と医薬品による自殺企画は、入院患者の過半数を占めた。

9) 遅発性末梢神経障害を呈した有機燐酸中毒の1例

釈永 清志 (立川総合病院) 麻酔科
山崎 光章・伊藤 祐輔 (富山医薬大麻酔科)
樋口 昭子 (富山県立中央病院) 麻酔科

有機燐殺虫剤(ディブテックス乳剤[®])を服用し遅発性の末梢神経障害を呈した症例を経験したので報告する。

症例は50歳男性。昭和63年1月29日、17時30分頃、車庫で意識不明の状態では倒れているところを家族に見された。救急車にて某病院に担送されたが、原因不明のため20時30分富山医薬大付属病院麻酔科に転送された。

急性期には意識障害、呼吸不全の他、消化管びらん、急性肺炎等を呈したが、集中治療により回復した。しかし、第20病日を経過する頃より、四肢遠位側優位の疼痛と運動麻痺(wrist drop, foot drop)を認めた。有機燐剤の一部には本例の様に遅発性末梢神経障害を呈するものがあり、十分な注意が必要である。

10) 慢性疼痛入院患者3例にみられたヒステリー発作

穂苺 環・渡辺 重行 (新潟大学) 麻酔科
森岡 睦美・下地 恒毅 (山形大学) 麻酔科
原 祐子 (山形大学) 麻酔科

ヒステリーは精神科領域における神経症の1つである。痙攣、運動麻痺、失声など種々の身体症状として現われ、周囲の関心をひくことを疾病利得とするものを転換ヒステリーという。今回演者らは、10年に及ぶ慢性疼痛患者3例がペインクリニック病棟入院中にヒステリーと思われる全身痙攣、後弓反張発作をおこし、うち1例は治療に難渋したことを報告した。

3例は皆家庭的に恵まれず、将来に不安が強かった。

疼痛も難治性で、主治医も治療に苦慮し、患者との関係に問題があったことを否定できない。注目を受けたいという潜在意識は、裏返せば医師、看護婦、家族の愛が足りなかったことの証明であろう。

11) 新潟市民病院麻酔科外来を受診した顔面痛患者の統計的考察

丸山 正則・小形 雅子 (新潟市民病院) 麻酔科
北原 智子・小野寺真由美 (新潟市民病院) 麻酔科

当院に麻酔科外来が開設されてからやがて10年が経過する。10年間のデータ検索の1つとして今回顔面痛について調べた。

当院外来の新患数は年間約150~200人見当であるが、この2年はどは、やや増加傾向にある。顔面痛はほぼこの1割で、年間10~20人程度であった。その内訳をみると帯状疱疹がその半分を占め、次いで三叉神経痛、非定型顔面痛の順であった。帯状疱疹は第1枝領域に多く、全例 SGB が施行され、PHN への移行例は意外に少なかった。三叉神経痛の治療としては、手術療法もあるが、少なくとも1枝のみ(特に眼窩下神経、第3枝など)に限局している三叉神経痛の場合には、やはり神経ブロック療法が第1選択と思われた。

12) 星状神経節ブロック(SGB)により自覚症状の改善がみられた網膜色素変性症の1例

西村 喜宏 (誠心会占田病院) 麻酔ペインクリニック科
高橋 利明・山川 浩司 (同 整形外科) (新潟大学麻酔科)
富田美佐緒 (新潟大学麻酔科)
坂井 豊明 (新潟県立占田病院) 眼科

網膜色素変性症は原因不明の遺伝性疾患で眼科において種々の治療がなされてきたが、いまだに有効な治療法がない。最近ペインクリニック領域で網膜色素変性症に対して SGB が症状の改善に有効と言われている。今回、網膜色素変性症の患者に繰返して計82回 SGB を行ったところ、読めなかった新聞の字が読めるようになった等の自覚症状の改善が認められた。視野、視力については、SGB 施行前後で差があるとは言い難いという結果となった。しかし網膜色素変性症に対して有効な治療法がない現在、今後もこの患者に対して SGB を続けて経過を観察したい。